

[成果情報名] 収量性向上のためのバレイショ「アイユタカ」の栽培法

[要約] バレイショ「アイユタカ」は県内産種いもを用いる場合、春・秋作とも標準施肥量で、栽植密度は春作では株間 20cm、秋作では株間 25cm で収量性、高単価の 2L、L の収量、比率が高くなる。また、施肥量による障害いもの発生率の差はない。

[キーワード] バレイショ、アイユタカ、県内産種いも、施肥量、栽植密度

[担当] 総合農林試験場・愛野馬鈴薯支場・育種栽培科

[連絡先] 電話 0957-36-0043、電子メール morikazu@pref.nagasaki.lg.jp

[区分] いも類

[分類] 指導

[背景・ねらい]

青果用バレイショは品質による価格差がほとんどなく、収量性が収益性に直結しているため、本県農林業基準技術の施肥量の 1.5 倍前後が生産現場における標準的施肥量になっており、株間は本県基準（25cm）より狭い 20cm 前後で栽培され、収量確保が図られている。

バレイショ「アイユタカ」は、ジャガイモシストセンチュウ抵抗性を有し、収量性や外観に優れており、本県奨励品種として平成 17 年春作より一般栽培が始まっている。「アイユタカ」の優れた特性を発揮させ、収益性の高い安定生産技術を確立するため、施肥量や栽植密度と収量性、品質などを調査し、適栽培法を検討する。

[成果の内容・特徴]

1. 春作マルチ栽培における上いも重（収量）は、減肥区では栽植密度に関わらず、標準施肥区（以下「標肥区」という）より低収となる。標肥区では標植（株間 25cm）より密植（同 20cm）で多収となり、高単価の 2L、L の収量、比率とも高い。でん粉価は施肥量が増加すると低下する（表 2、図 1）。
2. 秋作普通栽培における上いも重（収量）は、減肥区では、栽植密度に関わらず、標肥・密植区と同等な収量となる。標肥区では、密植より標植で多収となり、高単価の 2L、L の収量、比率とも高い。でん粉価は施肥量による差はみられない（表 2、図 2）。
3. 「アイユタカ」の障害いもの発生率は、「デジマ」、「ニシユタカ」よりも低く、施肥量による発生率の差はない（図 3）。

[成果の活用と留意点]

1. 収量性向上を目指した栽培法である。
2. 一期作産種いもを用いる場合は、生育特性、収量特性は異なる。
3. 過剰施肥は、地上部の過繁茂、軟弱徒長を招き、茎折れ、病害のまん延、薬剤散布等の作業性を低下させるとともに、腐敗やでん粉価を低下させる原因となるので注意する。

[具体的データ]

表1 試験内容

1 使用する種いも	県内産種いも	
2 作型	春作マルチ栽培、秋作普通栽培	
3 施肥量	標肥, 減肥	
4 栽植密度	標植(株間25cm)	6,150株/10a
	密植(株間20cm)	7,380本/10a

注) 試験場所: 愛野馬鈴薯支場試験圃場

注) 植付日: 春作; 2月上、秋作; 9月上

収穫日: 春作; 5月中、秋作; 12月上

注) 春作マルチ栽培では透明マルチを使用

注) 施肥量 (kg/10a):

・ 標肥: N:18.9 P₂O₅:16.8 K₂O:16.8

・ 減肥: N:12.6 P₂O₅:11.2 K₂O:11.2

* 試験区は減肥区施肥分を標肥区、減肥区とも全面施用し、標肥区では残量を条施肥した。

注) 畦間 65cm で一定

表2 栽植密度、施肥量の違いによる茎数、株あたり生産量、品質

施肥量	栽植密度	春作マルチ栽培					秋作普通栽培				
		茎数 (本/株)	株あたり 上いも重 (g/株)	上いも重 (kg/a)	標準比 (%)	でん粉 価 (%)	茎数 (本/株)	株あたり 上いも重 (g/株)	上いも重 (kg/a)	標準比 (%)	でん粉 価 (%)
減肥	標植	1.5	520	320	92	11.2	2.9	573	352	94	9.5
	密植	1.6	448	332	96	11.2	2.9	485	358	96	9.5
標肥	標植	1.7	562	346	100	10.7	3.2	609	374	100	9.3
	密植	1.7	507	374	108	10.6	2.9	484	357	95	9.4

注) 春作マルチ栽培: 2001~2003年、秋作普通栽培: 2000~2002年の平均値

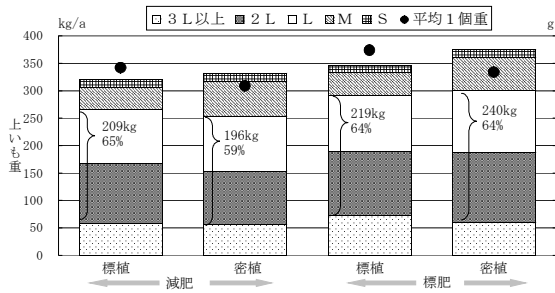


図1 規格別収量および上いも1個重(春作マルチ栽培)

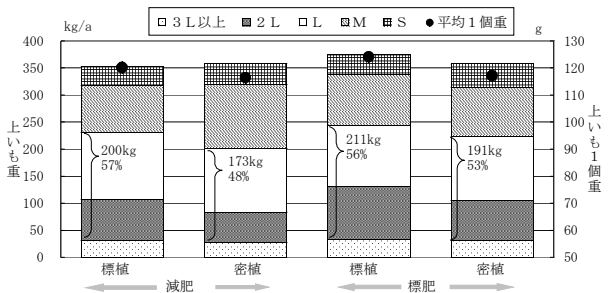


図2 規格別収量および上いも1個重(秋作普通栽培)

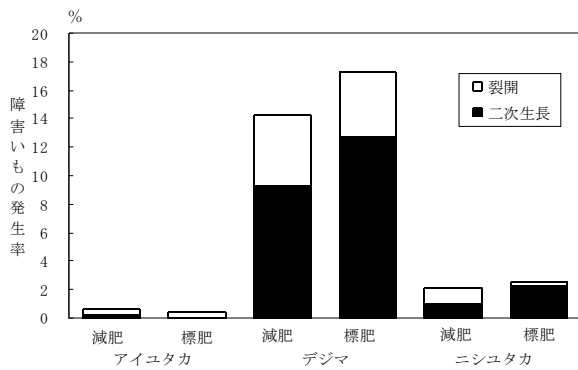


図3 障害いもの発生率(春作マルチ栽培)

[その他]

研究課題名: 有望系統の最適栽培法の確立

予算区分: 県単

研究期間: 2000~2004年度

研究担当者: 森一幸、向島信洋、中尾敬